
はじめに

高倉 浩樹

(東北大学東北アジア研究センター)

本書「モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費」は、モンゴル牧畜にみられる畜産物に焦点をあてた文化・社会人類学的研究である。牧畜の畜産物といえば、家畜の乳と肉、さらに毛や皮を使った衣食住に関わる物質文化が想起される。ここでは馬乳酒、フェルトやカシミヤ等が取り上げられている。

日本の日常生活のなかで暮らしていると、そもそも牧畜生活そのものが遠い世界である。とはいえ、家畜を伴い遊牧する生活はテレビなどで放送されることあり、想像可能である。しかしその地の人々が放牧地の生活のなかで何を作り出すかとなると、乳や肉以外にはなかなか思いつかないのではないだろうか。というのも、そもそも現代日本の生活では、食料にしても日常雑貨や道具を含めたモノは第一義的には購入する商品であり、あるいは家族や友人から贈られるものだからである。生活に必要なものを自分たちで作り出すという経験を得ることはなかなかない。

こうしたなかで、牧畜という伝統的生活を送る人々が、その生活のなかで果たして何を作り出し、それはどのような技術によって実践されてきたのか、というのはとても興味深い問いである。とりわけここでは、馬乳酒という飲料でありかつ彼らの食文化のなかではむしろ食料という範疇にはいるモノの歴史と現在が紐解かれている。日本のカルピス生産のヒントとなったといわれる馬乳酒がモンゴル地域でどのような文化的意味をもつのか、そしてそれはどのような社会的文脈のなかで必要とされるものなのかが説得力を持って描かれている。また多くの読者はフェルトがモンゴル牧畜と結びついているという事実そのものを知らないの

ではないかと思う。フェルトの原料は羊毛やラクダ毛であり、モンゴルでは古くから日常生活にとけこんだものである。フェルトは防寒着以外に、遊牧天幕の壁として利用される。フェルトによって住宅の素材となること自体が驚きだが、むしろ消耗品として常に補充される対象であるという本書での指摘は新鮮である。日本の木造家屋の例えば屋根が補修され使い続けられていく。これと同じように、天幕のフェルトも補充され部分的に更新されていくというのがモンゴルでの日常なのである。

本書の著者達の関心は畜産物が直接作られ、そして利用される放牧地の現場だけで留まっていない。ある意味では当たり前だが、伝統的牧畜は産業化され外部世界と連なっているからである。モンゴル国は1924年に世界で二番目に社会主義国として独立し、その後社会主義的な工業化を進めてきた。1990年に市場経済化したのが、いずれにしても独自の近代化と開発を進めてきた地域である。その意味では伝統的牧畜は畜産業として近代化され、農村ならぬ牧畜地域以外の都市部にも食料供給を行うという歴史を経てきた。この点で、乳製品の工業化はそれ自体重要な研究対象である。ただ乳製品の商品化はソ連との貿易を前提として実施され、社会主義時代には世帯経済そのものには影響しなかったという指摘は興味深い。そうした過程は先に記したフェルトも同様であり、工業製品化されたフェルトは遊牧生活の維持にどのように用いられていたか、その背後で製作されてきた世帯レベルでの自家製フェルトが社会主義体制崩壊後の文化の維持にどのように役だったのか詳細に記述されている。

関心を惹くのは、市場経済化後のなかでの牧民の世帯経済レベルの生存において畜産物がどのような役割を果たしてきたのかである。この調査分析はまさに参与観察に基づくフィールドワークを方法論の中核に据える人類学ならぬ解明である。そのなかでおそらく本書が開拓した当該研究領域の新機軸は、市場経済化で商品化された畜産商品を販売するためにそれを運搬する零細運送業者と道路の民族誌であろう。伝統的な物質文化だけでなく、工業製品の文化的分析や解釈が重要であることが指摘されて久しいが、それがどのような交通や物流のシステムのなかで

人々の日常生活を支えているのか、この点について人類学的研究は端緒についたばかりである。長距離トラックドライバーと同乗する形での調査というフィールドワークのなかで得られた民族誌的事実と人類学的考察は極めて刺激的である。

というように本書はこれまでモンゴル人類学で積み重ねられてきた中心的テーマである牧畜文化すなわち家畜管理や移動生活に関わる領域を飛び越えた点を明らかにしようと試みるものである。この点は極めて刺激的でかつ民族誌的な読み物としても大変おもしろい。重要だと思うのは、こうした現代的テーマの開拓が、流行の人類学理論を適用して行われるというのではなく、あくまで放牧地でのフィールドワークの地続きのなかで切り開かれていることである。したがって読者は、モンゴルの文化的伝統とその現代化の連続性を十分意識しながら読み進めることが可能なのである。

と同時に本書の価値は、モンゴル以外の牧畜地域の研究者にも開かれている。というのも、畜産物の現代生活における役割と商品化・市場化、そしてそれを取りまく社会システムというのは、いずれの牧畜社会においても同様に問いかけることができる視座だからである。いうまでもなく、世界のいずれの地域でも伝統的牧畜がそのまま維持されていることはない。農業開発や資源開発のなかで土地争い、様々な要因に基づく武力紛争によって難民化した状況など、世界の牧畜社会をめぐる現状は、現代世界の矛盾の最前線というべきものである。そのあり方を解明する人類学ならではの、視座が本書には内包されていると思うのである。

なお、本書は東北大学東北アジア研究センター公募共同研究「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」(2014年度)「モンゴルとカザフにおけるモノの域外流通と域内流通」(2015年度) [いずれも代表は風戸真理(北星学園大学)] の成果論文集である。筆者はモンゴルの北方の位置するシベリアの狩猟採集や牧畜の人類学者としてこれまで調査研究を進めてきた。文献調査や短期の訪問としてモンゴルの牧畜を見聞したことはあるが、本格的な調査研究はまだできていな

い。そんな筆者がなぜ「はしがき」を書いているのかといえば、上記の共同研究の受け入れ研究者だったからである。東北アジア研究センターの公募共同研究の目的は外部の研究者を巻き込んで、当センターの研究者ができない東北アジア研究を開拓することである。この意味で、この共同研究は大変な成功だったのではないかと、考えている。

代表者の風戸真理さんとは古くからの知り合いだったこともあり、彼女がモンゴルの伝統牧畜の文化やその変容について関心を基軸に研究をすすめていることは知っていた。しかし、この共同研究に図らずも参加することで、モンゴルの牧畜研究の最前線を垣間見ることができた。またモンゴル社会の文脈のなかから彼女が見いだした研究のシーズとそれを育てていく、そして他の研究者と共有していくあり方からは、方法論という意味も含めて多くのことを学んだ。このような経験が、本書の読者と共有できるのではないかと考えている。

なお本書では、モンゴル語のラテン字転写およびカタカナ表記の方法については統一せず、各章の著者に判断に委ねている。